

## 書 評

# 環 境 心 理 学

神 作 博 (中京大学文学部)

Hiroshi KANSAKU (Chukyo University)

この数年の間にわが国で環境心理学に関する書物が次々と出版されてきている。本年(昭和55年)9月24日から4日間、日本において国際的なセミナー(人間行動と環境の相互作用に関する日米セミナー)が開催された。この機会に環境心理学に関する書物を取りあげるのも意味あることと思われる。

上記のように環境心理学に関する刊行書はすでに十種を超えている。これらすべてについて紹介すべきではあるが、紙面の制約もあるので、次のような規準により下記の3冊を取りあげることにした。(i) 訳書でなく、日本人による著書であること、(ii) 発刊時期が比較的早いもの、比較的最近のもの、およびその中間位に当るものであること、(iii) 特定分野、特定の目的をもったものでないこと、(iv) 著者が単独のものから、各分野に適する複数の人の分担執筆によるものまでを含むこと、(v) 緒論、概論的なものと比較的専門的なものとの双方があること、(vi) 種々な視点から記述されたものであり、内容がバラエティに富んでいること、など。

このような規準により選ばれたのは次の3冊である。

入谷敏男著「環境心理学への道」、相馬一郎・佐古順彦著「環境心理学」、望月 衛・大山 正編「環境心理学」

入谷敏男著「環境心理学への道」

(日本放送出版協会, 1974, 206頁)

本書は実生活における環境問題を主題にして、わが国における政策のあり方、計画のたて方、現行の建築法規や公害条例の問題点、社会的・文化的風土との関連性などを含め、人間が生活をするうえでの最適環境のための基本的条件を、心理学の立場から検討した概論書であり、解説書である。NHK ブックスの No. 203 として刊行されたこともあり、わかり易い文章で書かれている。

本書の特徴は次の2つに集約されるように思われる。

1) わが国の心理学界において未だ環境心理の問題が熟成していなかった頃、この種の問題を実生活との関連においていち早く深く認識し、問題点の所在などを明らかにして、先導的役割を果たしていること、2) 単に心理学の分野の研究課題としてではなく、他の科学の分野との協同の学際的問題としてこれをとらえるべき必要性を論じ、しかも行政との関連という実践的視点から問題の把握を行なっていること。

筆者は1972年ストックホルムで開かれた「人間環境会議」(諸外国において環境問題を検討するため隣接の諸科学を動員して行なった研究の成果報告やそれに基づいてなされた改善成果の報告会議)に先立って国連が主催した「住宅問題専門家会議」に招待され、諸外国の建築家、社会学者、都市政策者らと討議した経験をふまえ、さらに、わが国における出生率の低下が住宅を中心とする都市環境の悪化と深く結びついていることを明らかにした実績に基づきこの書をまとめている。本書の特徴が著者のこのような貴重な経験から生じていることは明白である。

本書の構成は、序章「環境心理学の出発」、第1章「生活環境の現状」(住環境、現代住宅と近隣関係、都市環境)、第2章「環境空間と人間の行動」(探索行動、イメージ・マップ、群集)、第3章「環境デザインの諸要素」(行動空間、コミュニティ、都市)、第4章「環境計画」(環境計画の目標、環境計画のプロセス、環境心理学と隣接諸科学の役割)となっている。

序章においては、人間の現在の生活や意識がさまざまなものにより歪んできている現状が論ぜられ、これを正常な形に戻すための環境づくりの計画と実施についての課題の提起と解決のため環境心理学が登場したとして、その分野と問題の範囲を「人間の生理的生存を可能にする環境評価の問題」から「人口の動態的レベルにおける人口密度の移動、変化、定着化の問題」まで9つ挙げて

いる。

第1章は題名のとおり、生活環境の現状がさまざまな観点から述べられており、第2章では環境への人間や動物の働きかけの基本的問題が述べられ、第3章では種々な具体的環境について人間行動の観点から問題提起がなされたり、留意点が述べられたりしている。

第4章では環境計画の意義、目標、留意点が、高い立場からマクロな視点で論述され、さらに、環境計画のプロセスが計画担当者の見方から人間行動を考慮して論じられている。ここでの論述は、心理学者というよりも計画担当者、遂行者として人間行動を中心にすえていかに考えて行くかという観点から行なわれている。ここに著者の社会改善、新たな決意での人間の幸せを願っての新しい社会建設の熱意が感じられる。ともすれば狭い学問分野に閉じこもって人間社会、人間生活を論じている書物の多い現状を考えると、実践を目ざし、どのような方策でどうすべきかを具体的に示している本書は応用心理学にとって真のガイドブックとなるものであろうと思われる。

著者のこの熱意は終節「環境心理学と隣接諸科学の役割」で、自らが基盤としている心理学のあり方、方法論への批判となり、環境心理学の将来像へと発展して行く。これ以前の章節のすべてを環境心理学のあり方の前奏曲として位置づけたいくらい、的確に従来の心理学の問題点を指摘し、明確に環境心理学の進む道を示している。すなわち、著者の言によれば「……単に局所的な環境と人間行動との関係を論じ分析するだけでは、問題の解決が不可能になってきており、その環境をとり巻いている全体の文脈、そしてそれに関与し、機能している人間相互の考察を行なうことが必要……」であり、行動空間の学際的、総合科学的研究の必要性が具体的な局面についてそれぞれ強調されている。いままで、心理学においてこのような研究が等閑視されてきた原因として、実験室の方法論と厳密・微細な分析主義の固執とを挙げ、研究者各自の研究分野と社会との関係の欠落があったと指摘している。

この終節は実践科学としての応用心理学の考え方、方法論一般に通じるものであり、非常に示唆されることが多い。

著者が単独であるためやむをえないことではあるが、環境心理学の分野を広く詳細には論じえなかったこと、さらに、この分野の初期の書物であるためか研究例、図表が少なく内容は実生活に関連してはいるものの議論が抽象的観念的になりがちであること、などが残念に思われる点である。

本書の特徴でもあった行政批判、行政への提言という筆の運び方が、心理学の内容中心に進められる論述のしかに慣れた心理学徒にいささか違和感を与えたとしたらこれまた残念なことである。

相馬一郎・佐古順彦著「環境心理学」

(福村出版、1976、166頁)

本書は数年間に亘る環境心理研究会の検討結果をふまえ、準備を整え、著者たちが実施している研究の成果を具体例として示しつつまとめあげた環境心理学緒論とも呼ぶべき書物である。

本書の特徴は、これまでの他の類書が直接取りあげることをやや逡巡気味にしていた“環境とは何か”という問題に真正面から挑み、環境を理論的に論じていることである。

長期間に亘る検討の成果を感じさせるものがこの特徴を裏づけている。

本書の構成は、第1章「人間と環境」第1節 環境と人間のかかわりあい、第2節 心理学における環境、第2章「環境の理論」第1節 環境とは何か、第2節 環境研究の歴史、第3節 心理学における環境概念、第4節 物理的環境と社会的環境、第3章「環境の認知」第1節 認知環境と感覚の様相、第2節 認知環境の空間属性、第3節 認知環境と個人空間、第4章「環境と行動」第1節 環境の探索と操作、第2節 環境における接近と回避、第3節 環境圧力と欲求、第4節 人間—環境関係の様相、第5章「環境と意識」第1節 環境の評価、第2節 公害の認識、第3節 環境と住民運動、第6章「高密度空間」第1節 高密度居住の問題点、第2節 高密度に対する反応、第3節 高密度の背景、となっている。

これより明らかなように本書の特徴をなしているのは、第1章と第2章である。

第1章においては心理学の従来の環境に対する考え方を批判し、環境心理学としては能動的に望ましい人間環境とは何かを追求して行くのであり、どのような環境に適應できるのかを追求するのではないことを明言している。

第2章では環境とは何かを考え、“環境問題とは実は人間—環境問題である”と的確な言葉で言い表わしているところが印象的である。

さらに、人間科学においては、生態学的志向が要求さ

れることを述べ、心理学における環境概念について種々な学者・研究者の考え方を論じ、またアプローチの方法にも触れている。せっかく環境を理論的に扱えんとしながらもう一足突っ込んだ議論がほしいとの感を抱かせるのは本書が双書のゆえ読者層、紙面などでかなりの限定があるからであろうと推察される。

第3章、第4章では根本問題として環境の認知のしかたおよび環境への働きかけの諸相が述べられ、第5章、第6章では現実社会で生起している諸問題が取りあげられ、これに関連する研究が紹介され、また、これに対する著者たちの意見が述べられている。なお、ここで教育環境について言及がなされ、教育環境の心理学的分析の結果が紹介されているのと環境の意識のしかた、評価の状況を取りあげていることは従来の類書にないもう一つの特徴ともいえよう。

写真あり、図あり表ありで、親しみの持てる編集であるが現実の社会生活の諸問題について多くのページが割かれていないのは、著者たちが緒論ということを念頭に置いたからであろうか。計画中と聞く各論の続刊が待たれる。

#### 望月 衛・大山 正編「環境心理学」

(朝倉書店、1979、308頁)

本書は16名の専門家の執筆による極めてバラエティに富んだ人間行動にそくした豊富な専門的内容をもった環境心理学概論書である。平易に素直に内容に入って行ける感じがするのは、経験豊かな編集者の手による編集のゆえからであろうか。

本書の特徴は次の諸点に存すると思われる。すなわち、1) 心理学以外の領域の専門家も含めた多彩な執筆陣によるものであること、2) 各執筆者によりかなり専門的内容が盛り込まれているのにもかかわらず、心理学の予備知識のない人にもわかるよう、日常生活の水準で内容が論述されていること。人間行動を理解するうえに必要な基礎概念については本文中にきちんと説明がなされている、3) 環境に対する人間の行動という視点で全編の論述がなされていること、4) 環境心理学の研究のあり方(mode)をストコルス(Stokols, D.)の分類に従い、4種の様相すなわち、(i) 環境に働きかける能動相と働きかけにたいする環境からのフィードバックの受動相にわけられる「相」の軸、(ii) 環境にたいする認知型と行動による働きかけの行動型にわけられる「型」の軸

の交差による4様相にあてはめて整理し、そのそれぞれで学際的なアプローチを試みようとの見地に立っていること、5) 内容として、象徴環境や交通と道路の問題や発言などを扱っていること、など。

本書の構成は、序論、環境の知覚、環境原論、応用的領域、結論の5編へと展開するように配列され、それが次のように16の章に分けられている。Ⅰ「環境心理学の成立」(環境への学問的関心、環境の概念と関係領域、環境心理学の基礎概念の若干)、Ⅱ「環境の知覚」、1. 環境知覚の基本問題、2. 環境知覚の諸側面、3. 各種環境における知覚、Ⅲ「環境と行動」1. 心理的空間、2. 自然環境、3. 構築環境、4. 社会環境、5. 象徴環境—バウルソンによる、Ⅳ「環境心理学の諸問題」1. 大都市の生活環境、2. 都市環境、3. 交通・道路、4. 災害、5. 労働環境、6. 地域社会と精神衛生、Ⅴ「環境心理学の視座と使命」(開かれた系としての環境心理学、環境概念相互の関連、開発と保護の問題、環境心理学の実証的課題、まとめ)。

各編各章とも図、表や写真などをかなり沢山掲載し、最新のデータに基づき論述がなされている。

本書の特徴の一つとなっている象徴環境においては、実生活で使用される事物の形態が社会的拘束を受けたり、社会的状況の反映であったりすることが詳細に記述されている。それは次のような一文によって簡潔に集約される。“……一方の極で形態はもっぱら技術的に制約され、その物の実用的機能をあますところなく表現する。これに対して他方の極では、形態は社会的価値の担い手であり、その物またはその使用者が一定の集団の中で果す役割を表現する……”。物の社会的効用が生じるのは社会的に承認されたこうした象徴価値を通してである。ここに、この分野が環境心理学の中で坐を占める理由が示されているわけである。

また、環境心理学の具体的な問題として、前記のように都市環境、交通・道路、災害などにつき、それぞれの専門家により、問題点指摘、関連研究の紹介などが行なわれているのが目新しい。さらに、労働環境では現代の労働社会の直面する問題点が詳述され、今後の方向づけも示唆されている。

地域社会は精神衛生についてとらえてみると二つの側面、すなわち、ストレス源と精神衛生的資源(精神的健康を維持したり、不安定になった場合に回復させるのに役立つという働きをもつ)を有するとの洞察は的確であり、地域社会の見直しの必要性、その社会変動の精神衛生に及ぼす影響についての実証の必要性が叫ばれている。

このように、一つ一つの章の内容はかなり専門的に深

められており、しかも分野的にもかなり網羅されているように思われるが、多数の執筆者を揃えたがゆえの問題点もとうぜん表出してくる。すなわち、大目的では一貫しているものの各章の論述の狙いに差異が感じられたり、環境心理学とのかかわり合いをふまえての研究結果や社会事象の取捨選択の規準にやや異なるものが感じられたりする点である。

全般的に社会改善の具体性という点では迫力の乏しさを感じるが、終筆における“……ストレス耐性の異なる人々に、ある一定環境を押しつけることは、近代文明社会の暴虐以外の何にもものでもない。個性の独自性に注目した心理学は、……その対策について勇敢に提言を試み

るべきである”との主張をもって実践性への意思表示と受け取りたい。

※ ※ ※ ※

以上、狙いや内容、全体の性格も異なると思われる3冊の環境心理学関係の刊行書を紹介した。この3冊を通じて感じられることは種々の点でバラエティに富んでいるということである。これは環境心理学がこれから発展し、大きく統一されて行く分野であることの証左でもあると考えられる。

最近、また、環境心理学関係の書物の刊行をみた。これを含めて、再び機会があったら他の関連諸書についても紹介したいと考えている。